

## やんばるの森調査報告書（与那覇岳）

平成 13 年 11 月 15 日

第二東京弁護士会  
公害対策・環境保全委員会 御中

参加委員：朝倉 淳也・大川 淳子  
塩谷久仁子・津曲 貴裕

報告者 津曲貴裕

10 月 20 日、我々 4 名は、国頭村の中心に位置する亜熱帯林のなかで、沖縄島でも最高峰である海拔 498 メートルの与那覇岳に赴き、その自然環境、及びそこに生息する動植物の調査をおこなった。

年平均降水量 1800～3200mm というやんばる地域の豊富な雨量、亜熱帯気候を象徴するかのよう、当日も朝方から小雨交じりの天気となった。

午前 8 時、国頭村観光物産センター前にて今回の調査のガイドをお願いしている山川雄二氏と落ち合い、山川氏から、これから向かう与那覇岳にて遭遇する可能性のある動植物について説明を受けた。説明の中には、今回の最大の目的の 1 つであるノグチゲラももちろん含まれていた。今回我々は、大人数では目的のノグチゲラ等に遭遇することが非常に困難となるとの山川氏の助言に基づき、少数精鋭部隊を構成して調査に臨んでいたこともあって、山川氏より、「遭遇する可能性は十分ある」との言葉を得た。我々ははやる気持ちを抑えつつ、これから遭遇するであろう動物達に思いをはせた。

当日は出発時間が早かったため、通常であれば山川氏を通じて手配可能な、バナナの葉で包んだおにぎり弁当を入手することはできなかったが、近隣のコンビニエンスストアで食料を調達し、雨具を装備して出発した。

山川氏の車に同乗した我々は、与那覇岳登山道の出発地点に向かう前に、まず、比地大滝へ向かうルートの出発点を確認し、次に橋の上からは、四方に広がる鬱蒼と茂る森の概観を視察した。また、途中の沢筋では、豊富な降雨量を象徴するように、つきることなく豊富に流れ出す湧き水を堪能した。

出発直前までは、断続的に降り続いていた雨もほぼあがり、いよいよ我々は与那覇岳登山道から同山頂を目指して、視察を開始した。我々は、何一つ見逃すことのないよう、普段のフィールドワークとは比較にならないほど慎重に、且つゆっくりと進んだ。

登山道入り口より与那覇岳の中腹までは、整備された石畳の道が続いていた。しかし、その両側には、鬱蒼たる亜熱帯林が生い茂り、登山道を歩く我々の頭上も、その木々が覆い、日光の進入を遮断していた。それでも山川氏によると、先日の台風の影響でかなりの木々が損傷を受け、いつもとは比べものにならないほど光が届き、明るい状態であるとのことであった。

両サイドの森の中に視線をはわせながら石畳の道をゆっくりと進んで行くと、響き渡る鳥の鳴き声の中でもすぐに聞き分けられるようになるのが、「ウウー」という低い、牛にも似たカラスバトの鳴き声である。カラスバトは地面近くにいることが多かったようで、我々が進むと同時に前方で飛び立つという場面が多々見られた。

目指すノグチゲラを見逃すまいと、上方にばかり気をとられながら歩いている我々の足元では、シリケンイモリ（通称アカハラ）が踏み潰されまいとあわてて逃げ惑っていた。意識して足元をみていると、5～10メートルおきに1匹の割合で目撃された。

また、苔の密集している側面の石垣に目を移すと、そこには、周囲の色と同化してじっと動かないでいるキノボリトカゲ、さらにはリュウキュウヤマナメクジ等が目撃され、やんばるの森の豊かさをまざまざと実感した。

さらに進むにつれ、種々の木の実が実り、また、種々の鳥の鳴き声が響きわたるようになってきた。我々は、いつノグチゲラに遭遇しても良いように足音を忍ばせ、非常にゆっくりとした速度で進んでいた。突然、「カンカンカンカン」と甲高い、キツキ科の鳥がくちばしで木の幹をつついたときに発する音が聞こえてきた。我々は一気に色めき立ち、双眼鏡を手に、周囲を搜索した。しかし、このときはそれらしき鳥を確認することはできなかった。

そのかわりに、ノグチゲラと同様に希少な鳥である、国指定天然記念物のアカヒゲを何羽か観察することができた。しかしながら、あくまでもノグチゲラを最大の目的とする我々は、アカヒゲに満足することなく、なおも周囲の観察を続けた。

その後も幾度か、木の幹をつつく甲高い音や、ノグチゲラではないかと思われ

る鳴き声を確認するも、姿を視認することはできなかった。

幾度かの落胆の後、再び歩き出したそのとき、今後は、「キョッ、キョッ」という、短く甲高い、間違いなくノグチゲラの鳴き声をはっきりと確認した。鳴き声は間近から聞こえてきたため、我々は立ち止まり、息を殺して周囲をうかがった。姿を確認するも、すぐに飛び立たれてしまうということを1、2度繰り返した後、とうとう、我々は、前方の木の幹にとまっているノグチゲラを観察することに成功した。飛び立つまでの10秒足らずの時間ではあったが、我々は、レッドデータブックに絶滅危惧種として分類されている個体を、イタジイの生い茂る森の中に観察できる喜びを満喫したのである。

興奮覚めやらぬ中、なおも進むと、広い石畳の登山道も終わり、与那覇岳の中腹部から上は、狭く、鬱蒼とした森の中をようやく人ひとりがとおれるだけの、木々の間を縫うようにとおる山道となった。我々は、転ばないように、かつ、ハブを踏んづけてしまわないように注意を払いながら、起伏の激しい山道を、山頂を目指してすすんだ。

その後、山頂に至るまでの間、いまにも国指定天然記念物である日本最大のコガネムシの一種、やんばるテナガコガネや、同じく国指定天然記念物である陸性の亀である、リュウキュウヤマガメがここここに目撃されそうな雰囲気ではあったが、当日は残念ながらこれらを確認することはできなかった。

山頂にたどり着いたところで我々は、沖縄出身の山川氏から、同氏の家系の歴史を伺い、悠久の時を越えて受け継がれている人の血と、今なお太古の姿を維持するやんばるの森との偉大な時の流れに、想いをはせた。

しばしの休息の後、移動の時間がせまっていたため、我々は、急いで下山した。最大の目的であるノグチゲラはもとより、多数のアカヒゲやキノボリトカゲなどを目撃したという満足感と、もっと長時間、やんばるの森にとどまり、さらに多くの希少種に遭遇したいとの未練を抱きながら、やんばるの森を後にした。再び山川氏の車に乗り込み、森を抜け、今日の朝、山川氏と落ち合った観光物産センターが視界に入ってくる頃、空はすっかり晴れ渡り、車窓からは夏の終わりを感ぜさせる日の光が差し込んでいた。再び同じ姿でむかえてくれるであろう、やんばるの森への再訪を誓い、山川氏に別れを告げ、我々の今回の調査は終了した。

以上